



佐藤社長

エコレザー座談会

佐藤 栄一郎氏

(アサヒシューズ(株) 代表取締役社長)

吉村 圭司氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

稲次 俊敬氏

(NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

「健康と快適」に特化した オンリーワンの靴づくりに邁進。 ”アサヒスタイル”で中小店をバックアップ

本底、縫製から 接着の糊まで自社で生産

吉村 今回、ご登場いただくのは、福岡県・久留米市にある靴メーカー・アサヒシューズ(株)の佐藤栄一郎社長様です。昨年、会社更生計画を終了し、アサヒシューズ(株)と社名を変えて新たなスタートを切られました。製品の7割はこの久留米工場で生産されているとのことですが、まずモノづくりの姿勢・お考えからお聞かせください。

佐藤 我々は製造にあたって、本底の製造や縫製のほか、製品に使う糊の配合に至るまで、自社で行っています。さらに、PVC(塩化ビニル)、PU

(ポリウレタン)、手貼り(手作業による底付け)、バルカナイズ(加硫圧着)と多彩な靴製法をこの久留米工場で行っています。国内でここまで一貫して手掛けているメーカーは少ないのではないのでしょうか？

今日の靴市場は、大手の靴小売が流通を支配し、価格もコントロールし



1930年(昭和5年)に建てられた本社

ています。以前と同じようにこの状況に乗っけては、かつての二の舞になつてしまつと考えました。

そこで我々は、「快步主義」や「アサヒメディカルウオーク」といった、他社ではまねのできない「オンリーワンの靴」づくりに取り組んできました。また、海外生産を減らし、国内生産の割合を増やしています。これは、海外生産に頼ると、弊社の靴も他社の製品と同じようなものになってしまうからです。さらに、顧客や販売店のニーズに即座に的確に対応するためには、国内生産が欠かせないと考えたからです。

また、環境にも負荷をかけないよう、燃やしてもダイオキシンや環境ホルモンなどの有害物質が発生しな

日本エコレザーの6つの条件



- 1 天然皮革である
- 2 発がん性染料を使用していない
- 3 有害化学物質の検査をしている
(ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料)
- 4 臭気が基準値以下
- 5 適切に管理された工場で作られた革
(排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造)
- 6 染色摩擦堅ろう度が基準値以上



吉村氏

いソールも製造しており、社内ではこれを「ECソール」と呼んでいます。こういった独自のモノ作りをしていかないと、今後は生き残れないと思っています。

2006年から、「選択と集中」を推し進める

吉村 そついう靴づくりに変えたのはいつごろからですか？

佐藤 会社が1998年に倒産してしまいました。その後10年近くは取引先も商品構成もほとんど同じでした。しかし、2006年ごろから利益重視を掲げ、販売方針を「選択と集中」としました。儲からない商品は止め、儲かる商品だけを製造販売するためにです。その結果が、今日の商品構成になっています。

高齢者向けの健康・快適シューズ「快歩主義」は、開発当初より再建の柱として5900円以上の上代で設定しました。当時は社内の営業から「その値段ではとても売れない」と言われました。おかげさまで昨年の年間販売実績は58万足となり、累計850万足販売しています。ビジネスシューズ「通勤快足」は販売数量の減少

も覚悟して安い品番はすべてカットし、1万3800円を下限価格にしました。

吉村 「選択と集中」という経営方針の転換は、リスクも大きかったかと思いますが、そのあたりはいかがだったのでしょうか。

佐藤 「快歩主義」が今日のように売れるようになるまでに、10年ほどかかりましたね。販売方針の改革はチャレンジであり、失敗の連続でした。今でも弊社の靴は高いと言われます。ひざのトラブルを防止する靴「アサヒメディカルウォーク」は、ひざを外側に回旋させるソールが特徴で、3万5000円のものがあります。一般の靴専門店には並ばないように思われていましたが、久留米市のふるさと納税の返礼品に出したところ、一時は



若い人が働く工場内

生産が間に合わないほどの人気となりました。

靴専門店のフィルターを通さず、ダイレクトに消費者に案内をかければ、これまでとは違った市場も見えてきます。食わず嫌いの専門店にも高額品にチャレンジしてもらっています。が、おもしろいもので、売れ出すと、お店からは「高い靴のほうがいい」と言われるようになります(笑)。

200人の営業が年間1万店を訪問し、販促支援

吉村 靴専門店の数は年々減っていますが、販売ではどのような活動がされていますか？

佐藤 当社には「アサヒスタイル」と呼ぶ営業活動があります。これは小さな専門店でも、これまで売ったことのないような高価格商品にも挑戦してもらい、ともに市場を開拓していくための活動です。営業が売場に向き陳列棚の掃除から始め、店内ディスプレイなど装飾支援をします。また、足型測定会といった店頭イベントの開催も行っていますが、集客もあり、非常に好評です。

200人の営業が、年間1万件も



稲次氏

の売場を訪れ、一昨年は700件ほどの新規開拓をしました。昨年は350件ほどにペースダウンしました。増える一方で、廃業されるお店もあり、300から400店舗を開拓して、はじめて現状維持ということになりました。今後は訪問する業種・業態を見直す必要があるかもしれません。

稲次 国内の自社生産比率が高いということですが、付加価値として「メイド・イン・ジャパン」をどのように捉えていますか？

佐藤 消費者にどちらが良いかと聞けば、「メイド・イン・ジャパンのほうが良い」と答えるでしょう。しかし、靴は実際に履いて歩いてみないと「本当に良い」という声にならないでしょう。メイド・イン・ジャパンの価値はそ



「アサヒ
メディカルワーク」
(レディス)

「快步主義」

の実感にあるのではないのでしょうか。同時に、国産なら少ない在庫月数で回すこともメリットになります。例えばブーツはこの時期、納品したらそれで終了ですが、ゴアテックス使いの「トップドライ」のブーツは、売れ行きが良く、顧客や売場のニーズに合わせて12月まで生産して、サイズフォロームでもできました。国内生産は、売れ行きに合わせて生産調整ができることも大きなメリットとなります。

稲次 「アサヒメディカルワーク」は、私も購入して履いています。大変軽快な靴だと実感しています。甲革の風合いや質感、履き心地も大変良いですね。この革も国産のものですか？

佐藤 当社が使う素材では、革の比率は全体の2割ほどですが、2万円クラスの「アサヒメディカルワーク」に使っているのは、兵庫県たつの市のあるタンナーさんの革です。もともとは財布用の革で、他では得られない独特のしっとりとした柔らかさと優れた質感があります。この革については、コロンブスさんが靴クリムム「ブートブラック」を使った手入れ法のチラシを特別に作ってくれて、靴屋さんに

配布しています。

「健康と快適」に、「安心・安全」を付加する

稲次 そのタンナーさんの革であれば、我々日本皮革技術協会が推進している「日本エコレザー」認定取得の実績があります。御社は「健康と快適」をモットーに取り組んでおられるので、「日本エコレザー」認定の革を使えば、「安心・安全」という付加価値がさらに加わりますね。

佐藤 「通勤快足」では、ゴアテックス使いがほとんどなので、使用する革もゴア社の認定が必要になるという制約がありますが、「日本エコレザー」を使うことは可能でしょうか？

稲次 有害化学物質検査済みの革を認定していますので、大丈夫かと思えます。むしろ信頼性は高まると思います。環境や化学物質に対しては、海外企業のほうが関心が高く、ゴア社の賛同は得られるのではないのでしょうか？

ある会社の事例ですが、ヨーロッパに売り込みに行った際に、「日本エコレザー」認定を受けた革だと説明した



ところ、すぐに採用になったと報告を受けました。

佐藤 日本には、PVCインジエクシヨン製品が多く入ってきていますが、日本から中国に靴など輸出したら、可塑剤として使用しているフタル酸エステル類の規制によって、ストップが掛かってしまいます。ヨーロッパも健康や環境に関するものはハードルが高くなっていますね。「日本エコレザー」では、クロムを使った革も製品ものでも認定されていますか？

吉村 クロムを使っても認定は可能です。ただし、赤ちゃんがかじっても大丈夫なように、溶出しないうことが求められます。この基準値は、環境先進国であるドイツの基準値など

を参考にして作られており、国際基準でもあります。

稲次 「アサヒメデイカルウオーク」にエコレザーを使ってみたらおもしろいかと思います。この靴を購入するよいうな消費者層なら、エコに対する意識はきつと高いことでしょう。また、インバウンド需要においても、「安心・安全」は求められています。

吉村 経済産業省も日本エコレザー基準認定制度の推進にはバックアップをしています。まず手始めに、現状の革についても基準に適合しているかどうかトライしてみてください。最後に、貴社の靴づくりで、今後の取り組むべき課題がありましたらお聞かせください。

佐藤 転換期となった2006年から毎年、複数の高校から一定の人数を採用しています。この結果、300人いる工場要員の3分の2は20代と若返っております。先輩を頼って地元で働きたいという子も多く、定着率は大変高いのです。

これまで縫製は、ベテランの多い子会社に出していましたが、今は100名近くの社員が本社工場で取り組んでいます。まだ経験が浅く、生産性は高くはありませんが、技術力の高いベテランに頼りすぎるとも将来的には問題があります。今は若い人に積極的に技術の伝承を行い、徐々にベテランから若い人に切り替えている過渡期にあります。これから5年後、10年後の彼らの飛躍に大いに期待しています。